

「フタクチロケイツ」——呪いを失う禍

フツ科

危険度：★★★★★

生息数：★★★★☆

生態

フタクチロケイツは原始的な特徴を持つフツ科の禍であるが、この禍が爆発的にその数を増やしたのは近代以降のことである。

この禍は人間の持つ「呪い」や「怨念」に対する恐怖感を感じる脳を摂取し、喪失させる。こうなると憑かれた人間は対人関係において様々なストレスを抱えるようになるのである。この禍が摂取するのは前述の脳だけであるが、それによるストレスに満ちた脳内の状況においてこの禍は活発化することも分かっており、単純ながら非常に完成された生態を持つ禍であるといえるだろう。

解説

呪いや怨念とはつまり「相手に嫌われれば悪いことが起こる」という漠然とした感覚を置き換えたものである。これは実は非常に合理的な感覚で、実際に群れ(社会)において相手に嫌われると個人は損をすることが多くなるのである。

る。これは嫌われ者は「群れ」の利点を享受できなくなるといって単純な作用である。呪いや怨念といった感覚は別にオカルトでもなんでもなく、人間の持つ本能的な危機回避能力であり、またそれがあることを前提として人間の対人関係に関する脳は作られているのである。

フタクチロケイツはこの呪いや怨念の感覚を摂取する。そうすることによって憑かれた人間は群れの利点を享受できなくなるのであるが、そこまで至るまでにはいくつかの段階がある。

憑かれた人間はまず「嫌われても良い(不利益の少ない)群れ」においての呪いや怨念を失くす。確かに特定の群れにおいては実際に嫌われることによつて直接的には不利益は生じない。しかしすでにこの時人間の脳は『呪いを恐怖しないならどう思考すればいいのか?』という疑問を感じており、ストレスを生んでいるのである。またこの「嫌われても良い群れ」の中で間接的には不利益は生じており、個人ではなく集団(あそこの人たち、あの性別の人たち、あの国の人たち等)として「嫌われていく」という過程を着実に歩んでいるのであるが、これは感覚的には理解しづらい不利益である。また『嫌われることを感覚では恐がっていたけど実際に嫌われてもたいしたことにはなかった』という実感を得ることにより、次の段階へ進みやすくなるという作用も起こっている。

言うまでもなく、このような段階を踏めば最後には必ず前述のような「群れの利点を享受できない人間」になってしまう。またもう一つ重大な問題点として、そういう人間が一人増える度に必ず、群れ全体に『群れとしての利点な

ど儂いものである』という空気を蔓延させることになる。これは人類全体の不利益である。

対処法

フタクチロケイツは近代において爆発的に数を増やした。それはまず科学の発展が原因であり、科学とオカルトという意味の無い線引きを生んだ。呪いや怨念は人類にとつて必要なものであるのにも関わらず、オカルトに分類されたのである。

この禍は特定の他人を嫌う人間に憑きやすいという特徴を持つ。それが幼少期に親を嫌いになるというパターンであった場合はほぼ確実に憑いてしまう。十分に成長したのちでも憑く危険性がある禍であるという点で、この禍の危険性は更に高くなる。

この禍への対処法としては、まず予防法として科学に傾倒しすぎない人間を育てることが第一である。技術ではなく思考・思想としての科学はこの禍に憑かれる危険性を孕んでいる。

また特殊な対処法として、「神」という感覚で「恐怖」や「怨念」の感覚をより絶対的なものへと書きしてしまうという手もある。嫌われることは「不利益」ではなく「神に禁じられた行為」にしてしまうのである。そうすれば「嫌われても良い(不利益の少ない)集団」というものも存在しなくなり、この禍に憑かれる第一段階が起こらなくなる。この対処法では他に様々な種類の禍に憑かれる危険性が高まるが、このフタクチロケイツに憑かれる危険性のみを限りなく下げるといふ点では有効と言えるだろう。

